

## 如意寺について

佐々木 令信

東山三十六峰、その一峰「如意ヶ嶽」(通称、大文字山)は、八月十六日の夜、大文字五山送り火で、最初に点火される「大」の火床としてよく知られている、標高四六六メートルの山である。来年は、平安京建都二二〇〇年にあたる。京と近江を結ぶ山路の一つが、鹿ヶ谷から園城寺(三井寺)に抜ける道で「如意越え」という。直線距離で約四キロ、歴史にいろいろ登場する。

『保元物語』中「新院・左大臣殿落ち給ふ事」には、保元の乱(一一五六年)に敗れた新院(崇徳上皇)が、三井寺まで逃れるために「如意山」に入ったものの、山けわしくして、馬を下り歩いてのぼったがままならなくなり、如意越えをあきらめた、と記されている。

『平家物語』巻第四「競」には、治承四年(一一八〇)五月十五日、平家打倒の挙兵を企てた以仁王が、三条高倉の御所を夜中にひそかに出てからのことについて、「宮(以仁王)は高倉を北へ、近衛を東へ、賀茂河をわたらせ給て、如意山へいらせおはします」とある。結局、女装の以仁王は、賀茂川を渡り、鹿ヶ谷から如意越えで、三井寺にのげられたのである。

また、鹿ヶ谷には、法勝寺執行俊寛僧都の山荘があり、後白河院を頂点とする旧来の貴族勢力が、平氏打倒の密議をこらしたところとして、著名である。

ここでいう如意寺とは、如意越えに沿った形で、東西尾根の南

麓一帯に存在した山岳寺院のことで、東西約三キロ、南北約一キロという寺域の広さであった。

園城寺には、紙本着色「園城寺境内古図」(重要文化財に指定されている)の五幅があり、そのうちの二幅が、ここでいう如意寺についての幅である。泉武夫氏(京都国立博物館)によれば、鎌倉末から南北朝初期に製作されたものであるという。

近年、如意寺跡は、その位置が山麓であるため遺構の残存状況がすこぶる良好で、遺跡の大部分が大きな地形変更を受けずに残存していることで注目されている。昭和六十年、梶川敏夫氏(京都市埋蔵文化財調査センター)は、「園城寺境内古図」の「如意寺」幅をもとに、如意寺の遺構を発見された。私も調査会に委員として参加し、現在は、古代学研究所が「如意寺跡調査会」(代表 坂詰秀一)を発足させ、現地の精細な地形測量と発掘調査を実施している。江谷寛氏(古代学研究所)に、「古図」の「如意寺」幅に描かせた堂塔の遺構、本堂前面に描かれた石段など如意寺の発掘現場を案内していただいた。一昨年の十月、今年の六月と如意寺を中心とするシンポジウム「山岳寺院の諸問題」が、この多目的ホールで開催され、各地の調査事例が報告された。この三階ラウンジには、如意寺の遺跡が展示され注目を集めた。

如意寺が、園城寺の別院として「園城寺古図境内図」にみられるような最盛期を迎えたのは、園城寺五十八代長吏隆弁のころからとおもわれる。

『日本仏家人名辞書』所収の「天台宗如意寺門跡歴代」には、

「門跡初代隆弁弘安六、八、十五寂——道珍——道瑜延慶二、七、二寂——道基——満意——兼助——公暁建保七、正、廿九寂——栄実建保七、十、六寂——頼仲——(門跡廃絶)」とある。

これは、おそらく『諸門跡譜』を参照して作成されたものともわれる。

藤原忠平の日記『貞信公記抄』天慶元年(九三八)四月十三日条に、「參入、欲行擬階奏事、而式部輔不參、皆在如意寺故平中納言態者、公卿徒然退出」とみえる、故平時望七七日忌仏事が、看見できる最も古い史料である。平親信の日記『天延二年記』には、天延二年(九七四)六月十三日条に、「為修会手秋摘參如意寺。依吉日奉拜墳墓。急於新修誦經。」同じく、八月二十八日条に、「故守御忌日。布十五段誦經如意寺。」という記事がみえ、平親信が如意寺に出向き、墓参りしたことがわかる。

『貞信公記抄』、『天延二年記』でわかるように、平安中期には如意寺が存在したが、いまここで問題にしたいのは初期における僧侶についてである。

慶滋保胤の『日本往生極楽記』に、如意寺に住した沙門増祐のことがみえる。天延四年(九七六)正月晦日に、如意寺で亡くなった沙門増祐の記載は、のち『扶桑略記』や『今昔物語』巻第十五「如意寺僧増祐、往生セルコト語」第十八に所引されている。如意寺は如意輪寺か、という問題はあるが、寂心(俗名、慶滋保胤)や寂照(俗名、大江定基)も、如意寺に住んでいたとかがえていい。

如意寺は、天台宗寺門派園城寺の別院であった。増祐、寂心、寂照が住んだ、その如意寺に、東密教団の寛空、寛静が関連していたという具合にかんがえられうるのではないであろうか。

寛空に関する主な史料は、『大日本史料』第一編之十三、三八八一—四〇八ページに集成されている。寛空は姓は文室氏、河内の人、円行、神日、観賢の三大老に灌頂法をうけ、延喜八年(九一

八)大寛寺で宇多法皇に重ねて灌頂を蒙った。天曆二年(九四八)東寺長者。同四年(九五〇)金剛峯寺座主。同六年(九五二)仁和寺別当。同一〇年(九五六)法務も兼ねた。康保元年(九六四)僧正。宮中に召されて仁寿殿や真言院で息災などのために孔雀経法を修法すること八度におよび悉く法験をあげたという。

東密教団の寛空と如意寺については、『元亨釈書』『本朝高僧伝』『伝彌広録』『仁和寺御伝』などには記載されていないが、

『僧綱補任』第二(興福寺本)

同(康保)二年 僧正 寛空東寺別当〔園法務。如意寺別当〕とみえている。

寛静に関する主な史料は、『大日本史料』第一編之十七、二二七—二四一ページに集成されている。『仁和寺諸院家記』恵山書写本(『仁和寺史料』寺誌編一)には、

西寺 九条 東寺西也

寛静僧正

文屋氏、左京人、肥後守源浮子也、寛空同母舎弟也。則灌頂資、号西寺僧正、又如意輪寺、

寛平法皇御弟子、

一長者、東大寺別当、高野座主、天曆九年十二月九日、任東寺入寺、康保元年七月廿日、任権律師、同二年十二月廿八日、転正、安和元年三月十一日、任権少僧都、天祿二年十一月廿八日、加任二長者、同三年五月廿七日、拜堂、天延二年二月十九日、補高野山座主、同五月十一日、転権大僧都、貞元二年十月五日、任僧正、七十六、天元二年十月十一日、入滅、七十九

と記されている。ここで注目すべきは、寛静が「寛空同母舎弟

也」というところであり、『尊卑分脈』や『僧綱補任』(彰考館本)にもいうように、如意寺と号していたということである。

寛和三年(九八〇)二月十一日、東大寺僧齋然が宋より齋した三国伝来釈迦如来像、蜀版摺本一切経などの入洛奉迎が行なわれた。行列は、朱雀大路を北に登り、二条大路より東に折れ、東大宮大路より北に登り、一条大路を西に進んで蓮台寺に入るコースであった。蓮台寺に入宋帰朝僧齋然の齋した文物が運ばれた。東大寺齋然は愛宕山に清涼寺を建てることを念願しており、河陽館(山崎津)↓蓮台寺↓愛宕山清涼寺という見通しのもとに、ひとまず蓮台寺に落ちつくことになったのであろうが、一〇世紀の平安朝内外の諸寺のなかで、蓮台寺に運ばれたのはいかなる意味をもつものであろうか。

ここにいう蓮台寺は、蓮台野の地に東密教団の寛空が、天徳四年(九六〇)九月九日に、開創した寺で、千本十二坊町にある上品蓮台寺がそれにあたるとかんがえていい。

寛空は、元慶元年(八八四)の誕生であるから、蓮台寺開創の天徳四年のとき、七十八歳であった。蓮台寺に常住したらしく、康保三年(九六六)二月六日、寛空は蓮台寺で入滅したと伝えている。

寛和三年、齋然の帰京の段階ですでに寛空は亡くなっており、入洛奉迎のときの蓮台寺別当が誰であったか不明である。おそらくは寛空以降も蓮台寺はその門流によって占められていたことが推測される。東大寺齋然が、河陽館↓蓮台寺というコースをとるについては、寛空の門流、東密教団がかかわっていたとかんがえられる。

昭和二十八年(一九五三)七月二十九日、齋然が宋より齋した清涼寺釈迦如来像に胎内納入品があることが発見され、翌年二月

四日からの総合的な調査の結果、絹製五臓六腑や彼の生涯や事績で不明とされていた多くのことがわかった。その一つに現当二世結縁状がある。

その中に、

伝燈法師位齋然天慶元年戊戌正月廿四日誕生、俗姓秦氏、天徳三年五月十八日受戒、師主寛静、天曆四年庚戌七月十五日誕生、俗姓多治氏、天徳二年十月廿二日受戒、師主法蔵権少僧都、

と記されている。これによると、天徳三年(九五九)五月十八日、齋然二十三歳のときに、東密教団の寛静を師主として受戒したことがしられる。『小右記』や『本朝麗操』によると、東大寺義蔵も東密教団の観賢の建てた般若寺に住んでいた。齋然が授戒した天徳三年は、寛空が蓮台寺を供養した前年で、師主寛静は五十三歳であった。しかも先の『仁和寺諸院家記』恵山書写本などでわかるように、寛静は寛空の受法灌頂の弟子であり、同母の舍弟である。

かつて「比叡西山麓普門寺私考——平安時代中期草創寺院の一視点」(『仏教史学研究』一三—二)のなかで、天台宗山門派と寺門派の確執について述べたことがある。

天元四年(九八一)、法性寺座主補任の問題をめぐって顕然化した山門：寺門の確執によって、寺門派の多くの門人は、比叡西山麓の里坊に居住した。正暦四年(九九四)八月、武力衝突により寺門は完全に山を下りた。

このような天台宗山門派と寺門派の対峙ということもかんがえあわせると、東密教団の寛空、寛静が、天台宗寺門派の別院で如意寺とその当時関連をもつということは、当然ありうることでありといわねばならない。